

ふるに、其のさき石浦長谷観音とて、往昔より石浦村に安置せしを、兵火の爲に堂宇焼失後、此の佛像をかりゆき、出羽町の愛宕社に安置せしを、慶長六年七月愛宕社移轉の時、観音も共に卯辰山へ移し、彼の山に於てまた愛宕社に安置せしを、別當明王院二代住職退院の時、今の観音山の地に隱室を造營し、彼の石浦観音を持ち來り、観音堂を建立し、隱室をば観音院と號し一寺とはなしたり。故に此の時より愛宕山・観音山兩山に成りたりと、三靈記にいへり。それに石浦七ヶ村の氏子より彼は訴訟に及びたるもの也。

則ち観音院に傳來する奥村伊豫守の書簡に、卯辰山長谷観音之儀に付、石浦百姓と観音院と出入有之、就其富山様より如此被成御書候。彼石浦へも此御書御見せ可然。とありて、九月十日の日付也。按ずるに、富山様とは利長卿の御事にて、慶長十一年の頃は越中富山に在城し給へり。其の御書は傳來せずといへども、石浦慈光院の傳説にては、此の時利長卿の御裁判にて、観音の像をば石浦へ取返し、卯辰観音院には新に佛像を造立す。故に石浦の像は古佛にて、卯辰の像は新作なりしといへり。さて石浦長谷観音

は、石浦社の本地佛なりしかど、明治元年神佛混淆御廢止に付き、別當慈光院住職僧盛雅、同年十二月上旬復飾の事を願出し、同月十二日許可相成り、長谷山慈光院の號を廢し、山號に據つて長谷勝治と改稱し、従前尊崇し來れる本尊長谷観音及び前立観音、その外佛像、佛器類を悉く取除け、観音堂を清淨に改めて假に神殿となしたり。さて本地長谷観音は舊藩社寺方の指圖に依りて、翌二年三月小立野寶幢寺へ移しけるが、寶幢寺は百姓町に轉地して、于今安置し、前立観音は大乗寺坂下の長谷院へ移したり。

○石浦山長谷寺廢跡

石浦長谷観音の別當所にて、眞言宗也。昔は石浦山長谷寺、後に長谷山慈光院と號す。享保十二年心蓮菴沙門月海が撰述せし石浦山長谷寺緣起一卷今社藏たり。その記中に云ふ。行基大德取大和長谷観音雕木餘材。刻十一面尊像。而自齋持於加州石浦。而撰勝區禪梵宮云々。住持寺僧守清規。而臨事法式尤嚴重也。と又云ふ。于時係天正之兵火。而盡燒亡。惜乎。纒昇本尊。逃于山中。兵塵漸定云々。民間氏子皆齋謝。急迎請本尊。各勵力再建本堂及一院云々と。

又改作所舊記に載せたる由來書あり。

寺屋敷御改之由に付、書付を以申上候。

石浦長谷観音堂者、養老年中松浦氏子孫草創に而、大和・鎌倉・石浦日本三長谷と申傳。石浦庄内上石浦村・下石浦村保嶋村・笠舞村・木・新保村・今市村・しめの村七村之住人氏神と仰ぎ、彼地に在住之人至于今參詣候。然に先年故安房殿下屋敷之内に打込御請取候。然共往古より在來候堂之由に而、其儘被爲置候。寛永年中に再興仕候刻、安房殿へ御斷申上候へば、可爲如前々旨被仰、造營いたし罷在申候。以上。

長谷山

寛文十一年四月廿八日

慈光院

御奉行所

御尋に付申上候。

安房殿下屋敷之内長谷観音慈光院屋敷、先規は石浦村領之内に而御座候。然所に石浦村領、先年安房殿下屋敷に相渡り候刻、右之官屋敷安房殿下屋敷之内に打込相渡り候にて、百姓共かまひ不申候事。

右宮屋敷先年之様子、百姓に相尋如此書付上申候。以上。

寛文十一年五月廿二日

田井村 喜兵衛

御改作御奉行

按ずるに、長谷観音堂再興の時、眞言僧覺遍を請じて別當となし、別當所を舊號に據りて、石浦山長谷寺と稱す。享保の新緣起に、其後取慈雲放光二瑞、略名寺號慈光院。とありて、是より長谷山慈光院と改稱す。但し其の年月は詳ならず。今尙考ふるに、寛永八年別當弘通が圖寫せしむる氏子地圖に、石浦山長谷寺或は石浦郷石浦村長谷寺敷地云々など載せられたれば、寛永の頃は長谷寺と呼べり。然るに正保二年閏五月、陽廣公法會諷經布施米配分の事に付き、執政本多安房守等連署狀に、眞言宗金澤慈光院とあり。されば慈光院と改稱せしは寛永の末比ならんか。是より二百三十許年、世々別當所なりしかど、明治元年十二月神佛混淆御廢止に付き、住職僧盛雅復飾して神職と成り、長谷山慈光院の寺號を廢し、後客殿・庫裏を破却せしめけり。

○石浦舊跡

加府事迹實錄に云ふ。石浦岩は、今慈光院の地邊也と。三